

國人和歌をよくするもの往々あり、是皇國淳化遠裔の島嶼に届るを知るべし、因てしるす、

元祿中、清の北京にまいりて、國にかへりなんとせし時よみ侍る、池城親方

たれも見よ今ぞまことのからにしききたのみやこをたちいづる袖

忍戀 眞壁親方賢寛

こゝろのみかよはぬ時はなけれどもよそ目にかゝるほどぞくるしき略○下

〔華夷通商考〕下 琉球

人物朝鮮ニ似テ、詞中華ニ不通、薩摩ノ國ヨリ諸事アヅカリ聞ク、此國ノ船漂流ノ時ハ、其所ヨリ長崎へ送届テ、長崎ヨリ薩摩へ渡シテ歸國ス、

〔白石子筆話〕下 琉球國之地形皆島に御座候、略○中 人之家居日本と同事に御座候、王城之様子は、明

朝の人琉球江使に參候人の書に記置候通、殿閣は三階作に御座候而、上の階は神を祭候所、中の階は王者之居所、下の階は臣庶之居所に候而、中華より封冊を請候時は、假に高樓を造り、使者之坐を設申候由御座候、但是も表向規式迄の時ばかりに御座候、常住は日本之家作同事に住居之由御座候、

十一月廿一日

小瀬復庵

〔西遊雜記〕四 琉球館を一見せしに、門番ありて内に入事を禁せり、凡百人ばかりは鹿兒島に渡り居て、琉球の産物を賣買して、又は交易する事にて、何も日本の言葉を七八分もつかふと云り、田舎よりも京へ登りて諸藝を習ふ様に、琉球人は鹿兒島に渡りて學文をし、諸藝を習ふ、和歌もよみ、手跡も見事成琉球人あり、天窓は有髮にて、小童の髮結ひしやふに、何れも丸わげにして、笄を差て居る也、衣も日本に言ふ居士衣の如し、規式祭葬の節は、色々の冠服も有べし、右は平生の形り也、五雜俎に琉球は醇也と記せしはむべ也、